

マタギから 授かる

マタギ資料館

マタギ神社

マタギ列車（秋田内陸縦貫鉄道 阿仁合駅）

根子番楽



打当マタギ、 鈴木英雄さん

東北などの山間に暮らし、集団で狩猟を行って生業とした「マタギ」。高橋優×北秋田市の旅は、そんなマタギとの出会いからスタートしました。その発祥の地といわれている北秋田市阿仁地区には、今も打当、比立内、根子などのマタギ集落があり、伝統の猟や信仰・文化が受け継がれています。

打当温泉「マタギの湯」という温泉宿に併設された「マタギ資料館」で待っていてくださったのは、代々、マタギの家に育ち、打当マタギのシカリ（頭領）を務める鈴木英雄さん（74歳）です。



鈴木 これは昔のマタギの服装です。今は全国統一された蛍光色のベストと帽子をつけていますけど、昔はこんなふうに。ちなみにこれは辰五郎っていう、うちのおじいちゃんです。

高橋 へえ、そうなんですね。

鈴木 熊を仕留めたことを「勝負した」って言うんですけど、仲間が集まると山の神の贈り物として「授かった」って言うんです。

高橋 熊が山の神の贈り物。

鈴木 仕留めたよっていう合図として「勝負だ」って言うんだけど、仲間が集まってくると「いいのが授かった」って言うんです。

高橋 なるほど。「大きいのが獲れた！」とかそういう言い方はしないってことですね。

鈴木 そうなんです。で、こちらにマタギの道具がいっぱいありますけども、



うちはわたしで9代目なんです。わたしまで途切れなくマタギが続いたの
でいろんな道具が残っていて、それを
展示しています。ちなみにこれがマタ
ギにとって大事なフクロナガサって
いう刃物なんですけど、柄の部分がこ
うやって袋状になっているんです。木を
切ったり、熊を解体したりするのに使
います。あと、熊が木の根の奥に入っ
ていたり、打ち損じて苦しんでいた
りするときは、近くの木を取って枝を払
って、その木の先にこのナガサを挿し
て槍やじりにして使います。



高橋 あゝ、なるほど！ このテッキ
ヤアシとかアブケグルミというのは？
鈴木 カモシカの皮でできた防寒手袋
と履き物ですね。
高橋 なんだかアイヌの言葉みたいで
すね。
鈴木 そうですね。ちなみにアイヌの
人たちはイオマンテという儀礼をされ



ると聞きますけど、我々はケボカイッ
ていう、山の神に熊を授けてもらった
お礼をして、熊の魂を山の神に返す儀
式をするんです。このあとご案内しよ
うと思っていますが、山の神は女の神
様なんです。特にわたしたちが信仰す
る山の神は、それは醜い、やきもち焼
きでヒステリーを起こす大変な神様だ
といわれています。でも、自然界は全
部山の神のもとにあるって、わたした
ちマタギは信じていますので。例えば、
山が何日も荒れて入れない、または山
に入っても授からないっていうのは、
山の神の機嫌がわるいんだっていうこ
とで、オコゼという魚を乾燥させたも
のを供えてお祈りすると、自分より醜
いものがこの世にいるということで機
嫌を直してくれるといわれています。

高橋 へえ。
鈴木 それと、山の神は女性が嫌いだ
っていうことで、女性が身につけたも
のは持って行かないとか、いろいろ
われが違って。子供が生まれたらその
年は休むとか、昔はいろいろ厳しい掟おきて
があったようです。
高橋 今は変わったんですか？
鈴木 そうですね。昔は、猟をする前
は1ヵ月、女房と同じ部屋で休まない

とか、山に行ったら女性のことは話さないとか。つまり、山に入れば余計なことだと思うんです。山は、とにかく危ないことがある。例えば勝負して倒れたその熊に襲われて、けがをする人もいっぱいいます。熊は倒れたから大丈夫じゃなくて、倒れても引き金を引くように近づかないと、致命傷にならない熊は最後の力を振り絞って立ち上がってくるんです。倒れ方などで判断はできますけど、慣れない人は襲われることがあります。



高橋 鈴木さんは、そういう危険な経験はされてないんですか？

鈴木 おじいちゃんからしつこく聞かされてきたから大丈夫ですね。例えば「真上にいる熊は撃つな。撃つてもし当たっても転がるようにして向かってくるから、ずらして撃て」とか。

高橋 へえ。何歳ぐらいからマタギを始められたんですか？

鈴木 中学生の頃からおじいちゃんが授かった熊を、次の日に学校休んで一緒に取りに行ったり、うさぎを追いか行ったり、いろいろ手伝っていました。

ね。その頃はマタギという意識じゃないですけど。でもそういうときに「いいの授かったぞ！」っていう言葉を聞いたたりして、マタギの考え方を知らず教わっていたんだなって。

高橋 「俺はやりたくねえ！」って思ったことはないんですか？

鈴木 うん。村中が銃を持つ人、持たない人関係なく、当たり前山に行つて勢子^{せこ}をやっていたし。

高橋 勢子というのは？

鈴木 熊を追いつてる役割のことを勢子^{せこ}って言います。あと、うちは不便なところなので病院も遠いし、熊のあらゆるところを薬として使っていたんです。熊の胆^いっていう、胆嚢^{たんのう}なんだけど、これなんかは、昭和60年代だとグラムで2万円以上した。お産のあとがわるいときは熊の血なんかも飲んだり、おにぎりにつけて食べたり。

高橋 血を!?

鈴木 ええ。即効性のある疲労回復。鉄分が多いし。今でもわたしは乾燥したのを持って歩いています。ちなみにこれは熊の胆を粉状にしたものです。ちよつとなめてみてください。

高橋 なめる?! いいですか？
なめてみますよ？

おお、うわっ、にがっ!!!
うわっ、にがっ!!!
ん、苦い!!!





鈴木 この苦みの刺激が効能の一つらしいんですよ。

高橋 すごい。すごい苦み。あとからどんどん苦みがくる。これってふつうどれくらいの量をなめるものなんですか？ ほんのちよっとだった気がするんですけど。

鈴木 米一粒分ぐらいっていわれているんだけど。わたしはお酒飲む前とか飲んだあとに、二日酔い防止のために飲むんです。

高橋 こういうものを各家庭に分けていたんですね。

鈴木 マタギ勘定といって、授かった熊は「勝負したからわたしのもの」ではなくて、仲間のものなんです。だから何かが欲しいときはお金を出して買うんです。たとえば自分が勝負しても。

そしてそのお金をみんなで均等に割る。
高橋 へえ。素晴らしい仕組みだなあ。

鈴木 では、お参りの用意を持ってきているので神社に行きましょう。





精まい家
元祖バター餅
(北秋田市)



BUTTER MOCHI

マタギのおやつ バター餅いろいろ



大川米屋のバター餅
(北秋田市)

米沢餅店の
バター餅
(北秋田市)



ほんのり甘くて、バターのまろやかな風味が広がるバター餅。ふわふわ、もちもちの食感で、冷蔵庫で冷やして食べるのもおすすめ！北秋田市を中心に家庭の味として親しまれ、山に入るマタギが携帯食にすることもあったとか。今では北秋田はもちろん、秋田名物として知られるようになりました。

材料の配分や作り方はさまざま。秋田県内各地で作られ、お土産としても人気です。





四季彩
秋田バターあずき餅
(秋田市)

鷹松堂 バター餅
(北秋田市)



マッコ工房
バター餅
(北秋田市)



高関製菓
北あきたバター餅
(北秋田市)



みうら庵
もちもち三角
(北秋田市)



川口屋
金のバターもち
(秋田市)



たけや製パン
バター餅
(秋田市)



愛花の
手作りバター餅
(北秋田市)

マタギとはなにか？

資料館だけでなく、マタギ神社にまで連れて行っていただき、おかげでその精神に少し触れることができました。そこで今度は、現在マタギ修行中という20代の若者たちにお話を伺うことに。



担当マタギとしての修行を続けながら、北秋田市の地域おこし協力隊として活動する山田健太郎さん（26歳）。北海道の大学を卒業後北秋田に移住し、同じく担当マタギとして山に入る木村望さん（26歳）。根子集落で生まれ育ち、林

業の仕事をしながらマタギを続ける佐藤歩さん（28歳）。3人に集まっていたのは秋田内陸縦貫鉄道阿仁合駅。その名もマタギ号という特別列車の中のインタビューです。

高橋 佐藤さんは3人のなかで唯一地元の方ですね。小さい頃からマタギになろうと思っていたんですか？

佐藤 最初はあんまり興味なかったんです。林業の仕事をしてるんですけど、5〜6年経って仕事にも慣れて山を歩けるようになってきたのと、職場にマタギの先輩がいたので、ちょっとやってみたくなっていう感じです。

高橋 マタギの方は他の仕事をやってる方が多いんですか？

佐藤 そうですね。会社に勤めてるけど、土日はマタギとか、そういう感じですよ。

高橋 なるほど、そういうことなんですね。木村さんは北海道の大学を卒業されたんですよね。どんなきっかけでマタギに？

木村 網走にある東京農業大学のキャンパスに通っていたんですけど、世界自然遺産の知床に鹿が増えて木を食べちゃう被害があって、そのことをきつ

山田健太郎さん



木村望さん



佐藤歩さん



かけに、野生動物と人間との関わり方に興味を持ったんです。それでいろいろ調べていたら「マタギ」のことを知って。昔から熊を資源としつつも、絶やさずに活用してきたその関わり方とか、そもそも生活の一部になっているところに興味を持って、大学を休学してこっちに來たんです。そのときに銃の所持許可を取って猟友会に入って。それで大学卒業後、再びこっちに來ってきました。

高橋 へえ〜！ そうなんですね。秋田に來て何年になりますか？

木村 卒業して來てから今年で3年かな。

高橋 じゃあ、マタギになって3年目



ですか？

木村 マタギになってって言っているかわからないですけど……。そもそもマタギって職業ではないじゃないですか。猟師って害獣駆除でお金をもらったりするぐらいで、職業としてはなかなか成り立たない。昔、マタギの人たちがお金あったのって、肉も皮も高く売れた時代だったからだと思うんですけど、今はそうじゃないので。だから生まれたときから家のすぐ裏に山があるところに住んで、熊との関わりがあって、そういう山との関わりのなかに鉄砲が入っているっていうことだと思っただけ。なので僕は違うとは言わないんですけど……。なんて言ったらいいか難しいですね。



高橋 なるほど、ありがとうございます。そのニュアンスがとってもらい、勉強になります。山田さんはどんな流れで？

山田 松橋旅館っていう、マタギの方がやってる旅館があるんですけど、僕も大学休学中にそこに泊まってマタギを知って。それがすごく印象に残っていて、そこからずっと、いつかマタギをやりたいっていうのが頭にあって。

高橋 へえ。

山田 人生のどこかのタイミングで、山に入って自然と関わる生活をしたいたいと思っていて。じゃあ後回しにするんじゃないって先にやったほうがええんじゃないかなって。それで地域おこし協力



隊なら、山のことを発信しながら活動できるかもと。

高橋 なるほど。ちなみに佐藤さん、地元の人で新しくやってみたいって人はいいますか？

佐藤 あまりいいんです。だから木村くんや山田くんのように自分と歳が近くて阿仁に移住して、マタギを志して頑張ってくれてる人がいると嬉しいですね。

高橋 変な質問ですけど、みなさんそれぞれマタギをやっていて「やっぱえ、楽しい！」みたいな瞬間ってあるんですか？

佐藤 集団で猟していると、今にも落ちるんじゃないかっていう山を歩かなきゃいけないし、熊撃ちに行くのも割と命懸けで怖い部分もあるんですけど。

高橋 割と命懸け……すごい言葉。

佐藤 でも僕は酒が好きなんで、猟が終わってマタギたちと飲んだるときが面白いんです。熊獲りに行くのも面白いんですけど、仲間と飲んでるときが一番楽しい。マタギってみんなやることなので、集団意識が高くないと。

高橋 あゝ。

佐藤 チームワークよくなきゃだめですね。だから仲間と一緒にいる時間が



大切だと思ってます。

高橋 木村さんはどうですか？ そういう瞬間はありますか？

木村 僕の場合はまず山に入るのが楽しくて。仕事の人たちと山菜採りに行ったときも、自分ひとりテンション上がっちゃって、思い返すと恥ずかしいなっつくくらい。鉄砲持ってるときは冷静にしているようにしてるとんですけど、山に入ることそのものが楽しいし。歩さんもそうですけど、みんなと山に行くってすごい面白いんです。

高橋 へえ。

木村 僕は飲めないんですけど、それでも歩さんの言ってることがよくわかる。飲めなくても一緒にいると面白い。そもそも僕がここに移住したのは、休学してこっちに来たときにいろんな人にお世話になったからで、そういう人たちと一緒に楽しいと思えることをしたいけるのが幸福ですね。

高橋 熊を実際に勝負したこともあるんですか？

木村 自分で勝負したことはないんですけど、一緒に行って授かったことはあります。

高橋 テンション上がりました？

木村 まず「勝負した」って無線が入





って、そこまで歩いて行ってあとは解体するだけっていうことが多いんですけど、疲れるし、解体を勉強しなきゃいけないので、テンション上がって楽しいというより必死ですね。

高橋 必死なんだ。

木村 授かってよかったなって思うんですけど、必死ですね。3人くらいで行って授かったときも、熊が立ち上がって襲われたりするって聞いたことがあるので最後まで気を抜けない。持っ

て帰って解体するのも何時間かかるので。そこはもう必死で取り組んでます。

高橋 必死になって嫌じゃないってすごいことですよ。ね。「なんでみんな必死になってんの?」とか思ったら、モチベーションはそこで終了じゃないですか。一緒にするのはおこがましいですけど、ライブをやっても、失敗だらけでつらいこととかあって、それでもなんとか最後まで必死に歌い切るとき



があるんですよ。「あれはなんだったんだ?」ってなるけど、また必死になりに行きたいって思う。

木村 巻き狩りに行っても「ばくせえ」って言う人は誰一人いないです。授からなくても「ばくせえ」って言うてる人、聞いたことないです。

高橋 そうですよ。いいなあ。山田さんはどうですか?

山田 僕は今年の春、集団の獵に初参

加したんです。だから僕もまだまだ本当に必死で、とにかく悔しい。ひとりでは怖くて山に行けないとか、そういうのがいっぱいあるんです。一緒に付いて行けばなんとかいけるけど、次、ひとりで行ったらもうわけわからないんですよ。そういう一つひとつがめっちゃ悔しくて、マタギの先輩たちが当たり前にやってることを僕もできるようになるまでやるぞって思ってます。



高橋 少年漫画の主人公のよう。

一同 あははは！

高橋 だいたい少年漫画の主人公って何もうできないところから始まって、成長していく。なんだか3人の話を聞いてると、一瞬、釣りの話を聞いてるみたいに思えるときがあつて。けど一方で、間違いなく趣味的なものとは違う何かを感じるんですね。たとえば僕が明日からやってみたいと思っても、すぐできるものではないじゃないですか。だからそれが宗教や信仰的なものでもないっていうか……。マタギってなんだと思います？

山田 生活じゃないですかね？

木村 生活の一部だったと思うんですよ。仕事でもないし趣味でもないし、一年の暮らしの中のキノコ採りや釣りや山菜採りと変わらない。そこにたま鉄砲が入ることで、敷居が高くなっているだけというか。

佐藤 僕の家も実はもともとマタギの家系で、ひいじいさんまでやってたんですよ。僕の場合は先祖がマタギやってたからっていうんでなく、興味本位で始めただけなんですけど。

高橋 たぶん、この記事を読んでくれているほとんどの人たちは、マタギと



いう言葉を初めて目にすると思うんですね。あわよくばそこに興味を持ってもらえたり、こういう人たちがいるって知ってもらえたりするだけでも何か小さな変化が生まれると思うんですよ。こうやってみなさんが必死になって、やめない。誰一人ばかばかしいなんて言わない。その魅力がなんなのかもっと知りたくになります。



AKITA NAIRIKU JUKAN TETSUDO

縦貫鉄道

AKITA NAIRIKU JUK

いざわ
内沢

らせ
瀬

みなみ
南

あい
二合

さ
草

おくあに
奥阿仁

あに
阿仁マタギ

たちない
立内

とざわ
戸沢

かみひのきない
上桧木内

さどおり
左通

うごなかざと
羽後中里

まつば
松葉

うごながとろ
羽後長戸呂

やつ
八津

さいみょうじ
西明寺

うごおた
羽後太田

かくのだて
角館

内陸線・人気の観光列車 その①



木目を活かした車内。ボックスシートや窓向きのシートには秋田犬のモチーフがあしらわれ、細かな部分に楽しみが隠されています。一般公募で決定した名称「笑EMI」には「乗った方に笑顔の連鎖を広げたい」という願いが込められています。





内陸線・人気の観光列車 その②

秋田縄文号

2021年2月にデビューしたばかりの、世界文化遺産登録を目指す「伊勢堂岱遺跡」などをモチーフにした列車。重厚感のある濃い茶色をベースにした車体には縄文の文様風のデザイン、車内は天井をはじめ、随所に土器や土偶、岩偶のイラストが施されています。



内陸線沿線のお楽しみ その①

お土産セット「マタギの玉手箱」

「たくさん詰まった」という意味のマタギ言葉「ホロホロカチョ」をテーマとしたお土産セット。熊の手形を印刷した箱には、みそ、米、お茶、漬物、ジュースなど、北秋田市の特産品10品が、「ホロホロカチョ」！

内陸線沿線のお楽しみ その②

田んぼアート

田んぼをキャンパスに見立て、色の異なる稲を植え巨大な絵を描く「田んぼアート」。秋田内陸縦貫鉄道の5ヵ所に施され、内陸線の車窓からもっともきれいに見えるよう作られます。

北秋田市ふるさと大使「ハローキティ」、伊勢堂岱遺跡のキャラクター「いせどうくん」など、地域にまつわる絵柄を楽しむことができます。見ごろは9月下旬まで。



秋田内陸縦貫鉄道に関する詳しい情報はHPにてご確認ください。 <https://www.akita-nairiku.com/>

根子番楽

若いマタギのみなさんのお話しを終えて向かったのは、北秋田市阿仁の根子地区。昭和50年代以前は山を越えるしかなかったという集落へと続く長いトンネルを抜けると、外はすっかり夜。もともと根子小学校の体育館だったという根子番楽伝承館に到着するなり、なにやら、舞が始まりました。



根子番楽保存会技術指導部長の佐藤頼秋さん（63歳）にお話を伺いました。

高橋 そもそも番楽ってどういうものなんですか？

佐藤 神楽はわかりますか？

高橋 はい、なんとなく。

佐藤 一般に奥羽山脈から東のほう、岩手県とか宮城県とか太平洋側は神楽って言うんですが、奥羽山脈から西側



のほう、青森、秋田、山形とか日本海側が番楽と言ったそうです。山伏神楽という名前でも呼ばれています。わたしは8歳頃から50年以上根子番楽をやってるんですけども、その当時の根子番楽保存会の会長さんが、「根子番楽は800年だ!」とよく言ってたんです。源氏の遺臣が平家の落人が山々に隠れ里みたいな感じで住んで、そこで番楽というものが言い伝えられたそうです。

高橋 ちなみにさっきやってくださったのは、という演目ですか？

佐藤 鞍馬^{くらま}という演目で、弁慶と牛若丸ですね。兵法比べが題材です。

高橋 エンターテインメントというか、楽しみのためのものとしてあったっていうことなんですね。

佐藤 そうですね。

高橋 今でいうコンサートみたいなものだったんですか？

佐藤 ええ、昔、そこそ神社の前で、奉納番楽というのがあったみたいなんですけれど、それが、のちに小学校ができて、グラウンドを使わせてもらって、集落のお祭りの日にお披露目するように。今現在は毎年8月14日の夜、ここで公開しています。

高橋 じゃあ、1年に一回の公開に向けて練習を？

佐藤 あとは、県や市の依頼を受けてやることもあります。練習は毎週水曜日、年中なんです。根子には小学生がいらないもんですから、この子たちはみんなよそから来てくれるんです。お母さんが根子からお嫁さんに行ったり、根子から別のところに仕事で行って、そっちで暮らしていたり。ここから時間的に車で20分くらいの距離、そういう方をお願いして。それ以上だと親御さんも大変ですよ、毎週ですか



ら。本当にありがたいことです。

高橋 見ていると、10代、20代、30代の方が多い感じがしますけど。みなさん小さい頃からやられてるんですか？

佐藤 そうですね、そこに座ってる方は、1名をのぞいて全員根子ですね。なかなか、大人の若い方も番楽会に入ってくれなくて大変です。でも各団体全部ですよ。青年会とか、婦人会とか、消防団とか、なんでもです。とにかく若い人が入ってくれなくて、引き継いでいくのに大変なところがあるんですけど、頑張ってると思います。